2002／7／4

Lot 研究会・トピックス資料

内川奈津子（早稲田大学教育学部2年）

「メディア・リテラシー」と松本美須々ヶ丘高校 放送部の取り組み

きっと、この研究会に参加している皆さんのほとんどが、「この子誰？」「何者？？」と思っていると思いますので、
今回のトピックスは私の昔話をしつつ行っていきたいと思います。

▽メディア・リテラシーとは？

すごく簡単に言ってしまうと、

「メディア・リテラシー」＝「メディアの読み書き能力」

放送部のメディア・リテラシーの活動は 4 つのステップに分かれている。

- 第1段階　メディア批判
- 第2段階　批判は何も育てない
- 第3段階　人間が伝え、人間が受け取る
- 第4段階　数あるメディアのコアにあるメディア・リテラシー

▽「テレビは何を伝えたか」

1994 年6月27日、松本市で毒ガスにより 7 名の死者、200 名を超える重軽傷者をだす『松本サリン事件』が発生し、メディアでは、第1通報者である河野義行氏が犯人であるかのように報道した。この番組は、「なぜ誤報を起きたのか」「防ぐことはできなかったのか」等の質問を、長野県内の全てのテレビ局の記者にインタビューを行い、それをまとめた証言集である。

またこの番組は、第 20 回東京ビデオフェスティバルで 2 つあるうちの、1 つの大賞を受賞している。

▽ ビデオを見てみよう

「受け手・送り手（みんな）で作ったメディア・リテラシーの授業」

「テレビは何を伝えたか」の制作したあと、私たちはもっと多くの人にメディア・リテラシーを知ってもらおうと思い、様々な活動を行った。その一つが、放送部員が先生役となって行うメディア・リテラシーの授業だ。この作品の中に出てくるのは、授業第 2 弾「記者の一日」。授業第 1 弾とは違い、私たち放送部員だけが授業を作るのではなく、テレビ局員に企画から入ってもらい、私たちだけでは分からない現場での思いを取り入れようとした。

▽メディア・リテラシーと、高校で起こっていたことの関連性

私たちがこの活動を行えた理由は、私たち自身が送り手であり、受け手でもあったということだと思います。マスメディアの言い分も、視聴者の言い分も分かるという立場だったからこそ、批判だけではない新たなメディア・リテラシーの活動ができたと思います。この活動を通してメディア・リテラシーを学ぶには、表現することの必要性を感じました。自分が伝える立場になることにより、自分自身が構成や演出をすることになり、制作者の想いや意図に気が付くことができるようになると思います。

▽「松本美須々ヶ丘高校放送部」って？

- 松本美須々ヶ丘高校は市内で4番目の進学校（らしい）。しかし、生徒の半数以上が推薦によって進学している事から分かるように、勉強よりも生徒会活動や部活が盛んな学校
- 放送の甲子園と呼ばれている、NHK コンテストの入賞常連校
- 部員数は２０名弱
- 部員の多くは、放送部を「もう一つの学校」と表現する。毎日午後4時から始まり、夜１０時まで行われる活動は、教科書のない教科のようであった。しかし、活動はハード・・・

＊おまけ＊

私が高校 3 年の推薦入試で書いた、自己推薦文です。
決して上手いとは言えない文章ですが、私の高校生活を一番良く表していると思い載せてみました。
（締め切り当日の夜、泣きながら顧問の先生と一緒に書いた思い出深い文章です・・）

決して楽ではない放送部の活動を私が続けてこれたのは、共に歩んできた部員と顧問の先生達が居たからだ。同じ部員である私自身も、この人たちにはいつも驚かされる。全員が自分の仕事に責任を持っていて、入部した当初、同じ高校生とは思えないほどだった。そして、本当に仲間を大切にし、何時間も何時間も話合いを行い、お互いに本音をぶつけ合う。そこには、部員だけではない、顧問の先生達を含めクラブという域を越えたコミュニティーがある。私達が納得するまで活動をやらせてくれる。顧問の先生いわく「おれも命懸けてる」。しかし、そうでなければ毎日 10 時過ぎまで活動はできない。わずか数ヶ月しか活動ができなかった先生達にも、私は感謝をしている。その人たちがいたから、私の今がある。

私は、作品制作と言う山に登り続けた。これまで3年間どれだけの山に登ってきただろう。振り返ると、頂上に立った（作品を完成した）爽快さは勿論だが、それ以上に苦しかった道程で、多くの人に出会い様々な場に遭遇できたことが、印象に残っている。その出会い自体が、私の「学び」そのものだったと思う。

私達放送部の取材にきた、砂川記者との出会いも新鮮だった。「新入部員の成長過程を追う」と入部したて私への取材も始まった。放送部には入ったばかりで、取材もあまりしたことがなく、されるということは勿論初めての経験だった。今まで自分とは全く関係ないマスメディアの世界の対象となった。その後砂川記者の優しく真摯な取材は、私の理想となった。

また、この夏3日間行われたメルプロジェクトの研究会に私は、放送部代表として参加した。このプロジェクトは、東京大学情報学環で水越伸助教授を中心に作られ「メディアと学び」について研究している。ジャーナリスト、教授、院生が集まり、朝から夜まで3日間メディアについて語り合う。そこには、本に書れていない概念を定義する本当の意味の「最先端」が討議されていた。専門で研究しようとする人たちの集まりであり、会話についていくことが精いっぱいだったが、そんな場所に自分が立ち会えたことに高揚した。しかし「分かりやすく人に伝える」事を心がけてきた私にとって、合宿は納得がいかず、水越先生にその思いをメールで率直に伝えた。「概念を構築している最中だから、うまく伝えられない私たちが未熟だね」ごまかさず、返ってきたメールに少しほっとした。

放送部に入らなかったら、このような人たちに会うこともなかった。そして、現代社会を私の住んでいる世界とはかけ離れた存在としてとらえ続けていたと思う。放送部の時間は私の前に社会を開いた「窓」だったと思う。